

奄美ならではの研修 ～続・無人島でよか余暇～

大富 将範, 飯山 清文, 大坪 睦貴, 小園 真介 (機械電気科)
大谷 泰行 (国語科), 除川 創 (英語科), 清水 慶子 (家政科)

1 はじめに

私たち鹿児島県教職員は、県の全域において普遍的で均等な教育を実現するという理念のもと、定期的な異動によって県内各地を赴任してまわる。新任地においてよりよい授業や生徒指導を行うためには、まずその地域の地政学的観点から地域特性等の深い理解が不可欠であるが、そのためには積極的にその地域に溶け込み、主体的に活動し、校外にも積極的に赴く必要がある。特にここ奄美群島区は、地理的にも歴史的にも本土との様相の差異が大きく、一つの行政区



出発前、本校正門にて

(県)の中でこれほど異なる気候・文化を抱え持つ地域は、全国的に見ても稀有であろう。

私たち高等学校職員の奄美群島区での赴任期間は原則として四か年または五か年であるが、県本土域でのそれが七か年であることを鑑みれば、地域理解に要することのできる時間は比較的短いといってよい。加えて奄美群島は世界的にも特異な自然環境を有し、世界でもこの地域にしか生息しない多くの動植物が存在し、また歴史的にも近代において薩摩・島津の侵攻・支配を受けていたことなど、鹿児島県職員として身につけておかなければならない知見は県内の他地域のそれに比べても特別である。

奄美大島は、徳之島、沖縄本島北部、および西表島とともに今夏にもユネスコの世界自然遺産に登録される予定である。その歴史的端境期に奄美に赴任している身として、奄美をより深く理解するうえで、まずは自然環境の豊かさ、亜熱帯気候の特性等について肌身を持って理解しようと、昨年に続き野外での宿泊体験を企画・実施した。

2 参加者紹介

機械電気科 大富 将範 (写真右から2番目)

奄美野鳥の会での月例探鳥会、奄美ネイチャーセンターでの自然観察会など、奄美の自然を積極的に満喫中。赴任三年目にして奄美の主要林道はほぼ踏破した。奄美の自然に触れたいと思ったら、まずは大富に声をかけてみるのもよい。学生時代はかごしま水族館と平川動物公園にてガイドボランティア等に従事。大学の卒論および修論のテーマは「屋久島におけるウミガメの生態に配慮した護岸養浜について」。

機械電気科 飯山 清文 (写真右端)

南薩生まれ南薩育ち、期限付き勤務校も初任の前任校も南薩地区。34歳で南薩アルカ

トラズを抜け出して生活する初めての土地が奄美大島。生粋の田舎育ちであるがゆえに、小学生まで「田舎は空気がうまい」という言葉の意味が分からず、イナカという場所には本当に美味しい味のする空気があるのだと思い込んでいた。大学の卒論テーマは「冷間加工における潤滑油の影響と材料流動の検出方法の検討」。

国語科 大谷 泰行（写真右から3番目）

伊佐市にある浄土真宗大谷派の寺の長男として生誕。跡を継ぐことも考えて、仏教系の大学に進学。今年度から奄美高校勤務となり、奄美の自然を満喫することばかり考えている。生まれ育った大口は山ばかりであるが、父親の出身が港町の阿久根ということと、泳ぎは得意な方なので、海でも十分楽しめる能力がある。大学の卒論テーマは「浄土真宗における真と偽について」。

英語科 除川 創（写真左から3番目）

大学を卒業後、百数十倍の倍率をくぐり抜け共同通信社に就職。記者として夜討ち朝駆けの生活を続けるもその生活に疑問を抱き、教職への転職を決意。仕事のやりがいは倍増したが、手取りが半分になった。刑事手続きと国際政治学をやや深めにかじったが、卒業に論文の提出が不要な学部だったため、卒論は書いていない。

機械電気科 大坪 睦貴（写真左から2番目）

地域により深く溶け込もうと、前任校赴任時から学期に一度はクラスの保護者との懇親会を実施している。どんなことでも経験してみたいと思うチャレンジ精神旺盛な鹿屋っ子。若い頃に遊びの限りを尽くしたので、同じ境遇の生徒の気持ちを理解するのが得意である。奄美のことをもっともっと好きになりたくて今回の研修に参加。大学の卒論テーマは「超音波洗浄とキャビテーションについて」。

家政科 清水 慶子（写真中央）

奄美大好き!! 奄美高校に勤務して5年目、アウトドアについて詳しくはないものの、興味は大。ただし、タナガ（手長エビ）捕りについては玄人はだし。昨年度のメンバーが執筆した研究紀要に感化され、紅一点は覚悟の上で参加。大学の卒論テーマは「奄美の食文化について」。

機械電気科 小菌 真介（写真左端）

キャンプ歴は長く、大学時代にはバイクにテントを積んで北海道の宗谷岬まで走破している。今回のキャンプに際し、軍用の80リットルのダッフルバッグや多用途サバイバルナイフ、ファイヤ・スタータ等を新調。現在は更に自然を感じたいと、テントを使わずブルーシート一枚のみでのキャンプを画策中で、その方向性が注目される。キャンプに対する座右の銘は、「キャンプは苦行である」。大学の卒論テーマは「バイオマスの浮遊外熱式ガス化法の研究について」。

3 研修に参加して（それぞれの所感） (1) 奄美を感じた二日間（大富 将範）

ア なるか，ハンミヤ島上陸

「わきゃ牛ゃワイド～ 全島一ワイド～♪」

携帯電話のスピーカから奄美を代表する島唄の一つ，ワイド節が小気味よく聞こえてくる。一年前，無人島キャンプでお世話になった船長の携帯電話の呼び出し曲である。

名は体をあらわすという言葉があるが，呼び出しの曲もまた体をあらわす。エナジードリンク「レッドブル」を髣髴とさせる，あの船長だ。

「お久しぶりです，去年エニャバナレ（江仁屋離島）のキャンプに送っていただいた者ですが，今年もお願いしたいと思ひまして」

「ハイハイ，イイヨ。イツー？」

いつものように船上なのだろうか，エンジンの騒音と強い島口で電話が聞き取りづらいので，その苦労を伝えるために船長の言葉はカタカナ表記することとする。

「11月の4日，ハンミヤ島にお願いしたいのですが。」

「マダサキダネー，ハンミヤハカザムキトカシオノグアイハチョクゼンニナラントワカランカラー，3日マエニナッタラモウイッカイデンワシテー，ハイハイ」

と言って，すぐに電話を切ろうとする。

「ちょ，ちょ・・・っと！」待ってくれ，こちらはまだ名前すら名乗っていない。そして，こちらはしっかりと船の予約を取りたいと思って電話しているのだ。日付さえ十分に聞き留めていなかったであろう今の会話だけで，確実に船を予約できた感じがまったく伝わってこない。

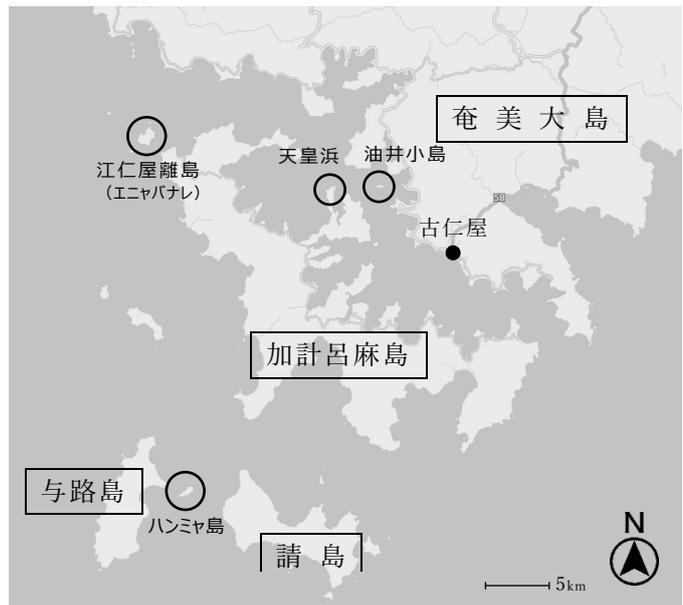
「11月の4日ですからね！土曜日ですからね！いいですか！10月の下旬にもう一度電話しますからね！よろしくお祈いします！」

こちらのほうから，何度も念を押す。

「ハイハイー」

上の空のような返事とともに，電話は切れた。

本当に，毎度予約が取れているのかヒヤヒヤだ。船長の言うとおりの3日前に電話して，「エ？11月4日？（キュウニデンワサレテモコマルヨ）ヨヤクガハイッテルヨ」などと言われれば，計画はそこでお流れだ。いくら文句を言ったところで「キイテナイヨ」の一点張りとなる，そのような未来を十分に想定しうる雰囲気の話であった。だからといってこちらはどうすることもできないので，船長がこの話を覚えてくれていることを天に願



本文中に登場する島嶼の位置関係

うという、半ば賭け事のような状況から、今年の計画も始まった。

今年度の参加者は七名。昨年からの生え抜きのメンバーは自分と大坪、小菌の三名。それに新しく飯山、大谷、除川、清水が加わった。清水は紅一点の女性だ。一人だけ女性での参加ということで、一緒に参加したいと言う申し出を受けたときは真意をはかりかねていたが、彼女は本気だった。まあ、大学のワングルや冒険系のサークルには多くの女子が属しているので、そういった意味では不安な要素はないのだろうが、それでもたいした覚悟である。

出発当日。ハンミヤ島に10時過ぎに到着して余裕を持って昼食を作るために逆算した結果、朝7時半に奄高地下駐車場に集合する。昨年は小菌の所有するトヨタ・bB一台に文字通り荷物をぎゅうぎゅうに詰め込んで、その隙間に四人でもぐり込むようにして出発したのだが（それはそれで趣があった）、今年は飯山のウィッシュと大谷のカローラワゴンが出動したので、結果としてグリーン車のごとく極めてコンフォータブルな往路であった（それはそれで一抹の寂しさもあった）。七名のうち三名が愛煙家ということで、一台が喫煙車となり、配員は自動的に決定した。各自、荷物を車に積み込む。出発の準備が全て整ったところで、昨年同様、正門前で出発前の記念撮影をする。校舎の頭上には、「100年の魂とうとがなし」の横断幕が見えるが、今の気持ちはさしずめ「冒険を愛する7人の魂とうとがなし」だ。わが校は一週間後に創立100周年記念式典を控えている。もし我われの身に何かが起こり、亡師亡友の碑に名を刻むようなことがあろうものなら、式典は急遽延期になるのだろうか。そういった意味でも周りに迷惑をかけるわけにはいかぬ、今年は例年以上に無事に帰還することが求められている。

目指すハンミヤ島は加計呂麻島の南、請島と与路島の間位置している。加計呂麻島や請・与路はアクセスの難儀さからしばしば「離島の中の離島」と呼ばれるが、それでいけばハンミヤ島は「離島の中の離島の中の離島」である。外洋に面しているため周辺は恒常的に風が強く、周囲の海流も比較的速い。島に開発の手はまったく伸びておらず、船を着ける栈橋も一つとして存在しない。島全体が珊瑚礁に囲まれていて遠浅の状態にあるので、海上タクシーのような比較的大きなボートでは船底をこするために島に近寄ることもできず、上陸には大きなボートから一旦小さな手漕ぎ舟に乗り換える必要がある。ゆえに、波が高かったり風が強かったりするときは小舟への乗り換えもままならないために、島への上陸は叶わないことになる。そして残念なことに、この海域は、この時季特に風が強く、また波が高いことが頻繁でなかなか条件が揃わないため、上陸できる可能性は低い。さらに日帰りならばその日一日が穏やかであればよいのだが、キャンプを張って一泊二日ともなると、二日間に渡って好条件が揃わなければ渡航は認められない。それがこの島の形状とあいまって、神秘的な魅力を生み出す一因にもなっている。

古仁屋へ向かう車の中から、船長に電話する。昨日、船長から連絡を受けていたとおり、この日の空は微妙な曇り空だった。現時点でも判断は保留、最終決定は古仁屋に着いてからということになった。

古仁屋に到着。とりあえず他のメンバーに適当に車を止めて置くようお願いして、海上タクシー乗り合い所に飛び込んだ。そこには一年前と同じピンクのポロシャツを着た船長の姿が。

「お久しぶりです～！」

「オオー、ゲンキダッタネ？」

一年を通してさまざまな客を接しているであろうに、自分のことを覚えていてくれた。

「キョウハー、ハンミヤハ無理ッチョ！」

開口一番船長の判断により、昨年が続いて我われの念願は打ち砕かれたのだった。

さて、そうなったのであれば、くよくよしていても始まらない。今すべきことは気持ちを切り替えて、早々に新たな行き先を選定することだ。船長曰く、この日の風向きと波の高さからして、現時点で紹介できる無人島は二つだけだという。一つは昨年テントを張った江仁屋離島で、もう一つが大島海峡の中に浮かぶ、油井小島だ。江仁屋離島は、確かにすばらしい島だ。しかしパイオニア精神の化身である我われにとって、一度開拓した島に食指が動くことはない。油井小島については以前から興味を持っていたこともあり、とりあえずそこへ向かって、満足がいかないようであれば安牌である江仁屋離島を目指すというところに話がまとまった。

どちらにしても昨年同様、海遊び用の手漕ぎ舟は借りて行こうということで、船長のOKをもらい、堤防の片隅に野ざらしで置いてある舟まで出向いて、勝手の分かる大坪・小菌とともにひっくり返して簡単な清掃を行った。中からカニやらフナムシやらが這い出てきたが、そんなことにワーキヤーということもなくなった三人で、そのことを少し寂しいと感じながら舟を担ぐ。一年ぶり二度目の作業ということもあり、特に船長に指示を受けることもなく、皆で協力して海上タクシーに積み込む。

今回は七人の参加ということで荷物の量も相応にあり、海上タクシーの甲板には荷物がところ狭しと並べられた。しかし甲板は、航行中に思いっきり波をかぶる場所だ。客の荷物に波がかぶることくらい気にも留めない船長のこと。さてどうしようと案じていたところ、飯山がおもむろにブルーシートを取り出し、全員の荷物を包んでくれた。こんなときの為に多用途のブルーシートを準備しておいてくれるなんて、さすがは飯山だ。ところで飯山の取り出したブルーシートの色はシルバーだ。まったく持ってブルーではない。つまるところシルバーシートなのだが、そう呼ぶとただの優先席になってしまう。シルバーなのにブルーシート。小菌が愛用しているのは、オレンジのブルーシート。まったくもってやっかいな名称だ。

この日は風が強く、波も高かった。出航してどれほどの時間が経過しただろうか、冒険のワクワクと行き先が決定しない不安と、みんなで写真を撮ったり船長と話して花が咲いたりして、本当に時間の記憶がまったくないのだが、目指す油井小島が見えてきた。

「アノシマダヨー」

繰り返し断っておくが、私は船長の「海の男」感が好きだし、敬意も払っている。が、なにぶん島口が強くて、注意して聞き取る姿勢でなければ電話でなくとも何としゃべって

いるのか分からない。その苦勞を理解してもらうためにも、船長の発言はカタカナ表記とする。

「ドウスルー、コノシマニスルカイ？」

船長の指差すその先には、『ドラゴンボール』に登場した界王星ほどの、本当に小さな断崖の島があった。この日は満月の大潮の日で、今まさに満潮の時刻だったのだが、断崖に打ち寄せる波の隙間にポツリと、見る限りおよそ一坪（畳二枚分）ほどの広さの砂浜が波に洗われていた。いや、これはどうみても精神論以前に、物理的に無理だ。一坪 3.3 平米に 7 基のテントを張るなんてできるわけがない。できたところで、活動するための余白がない。ネコの額どころか肉球だ。そしてむしろ、満潮の時刻にこの島を見ることができてよかった。もし干潮の時刻に、潮が引いて一面に広がる砂浜に案内され喜々として上陸していれば、その半日後には第十管区海上保安本部のお世話になっていたに違いない。「ドウスルー？」って、どうにもできないだろう。・・・しかしそこに、悪巧みを考えるもう一人の自分、小悪魔のリトル・トミー（推定身長 10 センチ）が現れ、肩の上にちょこんと腰掛けた状態でささやきかけてくる。「待てよ。あの小さな浜で『一坪よりはちょっと大きいなー、大坪だな』などとボケながら皆で一晩立ちつくすというのもある意味一興だぞ、そちらのほうが人生で五本の指に入る思い出になるんじゃないか？思い出を作りに来たんだろ？」と誘惑してくる。

判断は全て、操舵室で船長と二人きりだった自分に委ねられていた。

イ 無人島≡無人浜

不穏な空気を察したのだろう、小菌が操舵室に入ってきた。自分は過去にタイで三週間あてのないバックパッカーをしたり、中国も四日間旅行したが、彼は北海道の宗谷岬までホンダの CB400SF でツーリングを敢行するなど、ジャンルこそ違えど経験豊富で頼りになる参謀だ。今回のキャンプのメンバーでも最年少だが、最古参であり事実上サブリーダーのような役を担っている。

「いや～、厳しいっすよね・・・」

悩む素振りも見せないセカンドオピニオンで初診と同じ診断が下され、油井小島の選択肢は消えた。今回も昨年と同様エニャバナレか・・・ということで、一旦は話がまとまった。

しかし、諦めの悪い二人があまりに残念そうな浮かない顔をしていることに気づいたのだろう、船長がおもむろに口を開いた。

「ジャー、テンノーイク？」

「え？何ですか？」

「コノサキノサツカワニー、テンノーガキタハマガアルッチバー、アンタタチガムジントウムジントウツテイウカラー、ムジントウシカショウカイシテナカッターンバー、ベツニムジントウデナケレバイイハマガアルッチヨー。」（*あまりに長いので意識も含めて現代的仮名遣いで書き直す）

「この先の薩川ってところに、天皇陛下が行幸された浜があるんだけど、あなたたちが無人島、無人島って言うから紹介しなかったんだけど、別に無人島でなければいい浜があるよ。」

聞くところによると、この先に「天皇浜」、地元漁師の間で通称「テンノー」と呼ばれている風光明媚な浜があるらしい。エメラルドグリーンの上でいきなり「テンノー」と言われて天皇を想像できるほうが難しいし、せめて「浜」をつけて話をしてほしいのだが、船長にとってあくまで天皇浜はテンノーなのである。一見さんにそのような丁寧な説明などしない、という船長の人となりをこちらが分かっているからこそ、ぎりぎりのラインで意思の疎通をしている状態だ。

「デモソコハー、ムジントウデハナイ。チョビットナンダケドー、リクツヅキニナッテル」

ふむふむ、船長の話をもとめると、天皇浜は加計呂麻島の薩川湾の東端にあり、厳密には加計呂麻島と陸続きなのだが、それは砂時計のくびれ部分ほどのつながりであり、その部分は深い森で覆われていて道はなく、陸路で浜に到達することはできない。つまり無人島ならぬ無人浜ということらしい。環境は文字通り無人島のそれと変わらず、珊瑚礁もあり流れも穏やか、ロケーションは最高とのことであった。ただ難点は、ハブがいることだという。おいおい、難点がハブ!? こちらとしてはハブがいる・いない、なんていうのはキャンプ地選定の判断材料にならないし、むしろいるという緊張感から背筋が伸びた有意義な時を過ごせるではないか。もし出たのなら、焼いて食べてみるのも面白そうだ。この屈強巨漢な船長がハブを苦手をしているというギャップが面白かったことも加えて、我われには笑顔が戻った。五里霧中だった明日までの二日間の航路は、にわかには晴れ渡ったのだった。

天皇浜の西端側の岩礁に船を着け、バケツリレーで荷物を降ろす。明日の 13 時に迎えに来てくれるようお願いし、船長に別れを告げる。岩礁の上から砂浜まで、距離にして 2・30 メートルくらいだろうか、みんなで協力しながら荷物を下ろした。

天皇浜は全長 150 メートル程の小さな浜だった。まずは全員で浜の踏査を行い、浜の形状や植生などの特徴をつかんでからベースおよびテントを張る場所を決めることにした。天気は曇天、ハンミヤ島渡航は不可能というだけあって内湾にもかかわらず海側からの吹き上げの風が強い。船を着けた浜の西端の岩礁のすぐ近くに小高い山があり、その上に小さな石碑があった。表には「聖上陛下 臨御之地」、裏側には「昭和二年八月七日」とある。昭和二年といえば、大日本帝国憲法下において天皇が神格化されていた頃だ。その絶大な権威たるや、今では考えられない程に畏怖の念を抱かせるものだったろう。そのような時代に天皇陛下がこの地を行幸されていたのだと考えると、歴史の重みを感じるとともに、この研修が何らかの庇護を受けているような気がしてくる。

浜を端から端まで歩く。さすがに無人浜だ。清掃など特に行われたこともないのだろうが、人工的なごみはほとんど見当たらない。波打ち際にも、人間活動の産物であるビーチグラスなどは見当たらず、反対に人がいればすぐに拾われてしまうであろうきれいな貝や天然石、形のよい珊瑚のかけらが散らばっている。波打ち際から背後の山までの浜の幅は十数メートル程度、背後は切り立った深い森になっており、トゲを持つアダンをはじめとした植生が隙間なく密生していて、そもそもどこにハブがいるか分からないので容易に分

け入ることはできない。上陸地から見て浜の一番奥、浜の東端に、背後の崖が具合よく窪んだ場所があり、海風は相変わらず強かったもののその場所だけは風の影響が弱く、そこをベースキャンプに決めた。そのベースから程近い場所に、各自思い思いにテントを張る。キャンプが初めてのメンバーもいたので手伝う必要があるかと少し周りに気を配っていたが、皆滞りなく設営できていた。紅一点の清水は、今回のキャンプに備えて家の中でテントを張り、実際にその中で一晩を過ごしたという。無人島に挑む覚悟のようなものが窺えて頼もしい限りだ。また、除川は前任校で登山部を率いており、インターハイにも出場しているので申し分なし。大谷も何かとアウトドア派なので、結局今回のメンバーは全員が自活できるレベルにあった。先ほどまで何も存在しなかった無人浜に、色とりどりの7つのテントが寄り添うようにして並んだ。

テント設営が終わったら、今度は薪拾いだ。夜、焚き火を満喫するためには、日が高いうちからできるだけ多くの薪を集めておかねばならない。みんなフウフウ言いながら、小枝は抱きかかえるようにして、原形をとどめたままの大きな枯れ木は引きずるようにして、砂浜に転がる流木を一生懸命に集めた。おかげでベースキャンプの横には小高い薪の山ができあがった。燃料が揃えば、次にかまど作りだ。実は昨年のエニャバナレでの研修では、はじめての無人島ということもあって今思えば慎重になりすぎていた部分もあり、七輪やダッチオーブンなど、かなりラグジュアリーで文明的装備を持ち込んでいた。しかし事後の反省で、これがもともと無人島の野性味というか「何もない環境をあえて楽しむ」ことを、満喫し切れなかったのではないかという、我われの中でまれに炸裂する有意義な反省があった。物事は何でも、ある程度の制限があったほうが「工夫して解決する」楽しみのようなものがあり、逆に発想力が高まって結果としてよりよいものができるものだ。任天堂もキャラクターのマリオをデザインするに当たり、ファミコンの8ビットの荒い画素数で、マリオがちびマリオになった時に、体が小さすぎて上の服と下の服を分けて表現できないという難問にぶち当たった。しかし上の服と下の服を同色で塗りつぶして、もともとつながぎを着ているという設定にすることで解決した。そのつながぎがマリオに愛嬌を持たせ、結果的に世界的大ヒットの一因になった。

そもそも万能調理器具である七輪やダッチオーブンなどの重量物を持ち込むスタイルはオートキャンプ（車で出かけるキャンプ）のものであり、そうでない場合はできるだけ軽装を基本とするのが鉄則である。そんなこともあって、今回のBBQでは網のみを準備し、現地で石や珊瑚のブロックを積み上げてかまどを作る予定にしていたのである。

思いのほか海風があったので、かまどは「積む」よりも「掘る」ほうがよいということになった。大坪が率先して軍手をはめて、産卵したくてたまらないウミガメのような勢いで砂浜を掘り始めた。ほどなくして掘りあがった穴の周りを小石で少し盛り上げて整え、その上に網を渡してかまどが完成した。

まだ日が高く、特に寒いわけでもなかったが、できあがったかまどを前にとりあえず焚き火をしようということになった。要は早く火を愛でたいのだ。ここで満を持して登場したのが小菌だ。小菌はこの日のために、マグネシウム・ファイヤ・スタータなるものを準備していた。これがどういったアイテムなのかは彼が詳述するだろうからここでは割愛す

るが、名前こそかっちょいいものの、実態はただのスティック状のマグネシウム合金の塊である。一般的な着火源であるマッチやライターは水没してしまうと使い物にならないが、マグネシウム・ファイヤ・スタータはただのマグネシウムの塊なので、たとえ水没しても、湿気るといことがない。ライターのようギミックもないから故障という概念とも無縁なので、つまり、いつでもどんな状態におかれようとも、着火という機能を失うことがないという代物なのである。ではなぜこのような便利なものが一般に普及していないのかといえば、それは着火の方法に癖があり、ある程度練習を積まなければ火を起こすことができないからである。そして私は、共済住宅の隣に住む彼が、休みのたびにマグネシウム・ファイヤ・スタータを持ち出しては着火の練習を行っていたことを知っている。彼は常に、我われとは一ランク上の危機管理体制を引いているのだ。

小菌が一生懸命にマグネシウムに点火する姿を、愛煙家三人が紫煙をくゆらせながらやさしく見つめる。その紫煙はどうやって得たのかとは誰もおくびにも出さず、ほどなくして無人浜に命の炎が立ち上がった。まずは乾杯、そしてここから自己研修という名の自由時間とした。

思い起こせば、一年前のエニャバナレは灼熱の下での活動だった。和辻哲郎の『風土』的には、あれは「砂漠地帯」だった。日中の日射しが容赦なく牙を向いてくるので、タープの下に逃げ込むように身を寄せ合って耐え凌いだ。しかし今回は時期も 11 月、天候も曇天ということで、まさしくヨーロッパの「牧草地帯」、自然は我われに従順であり、合理的に対応してくれている。持参したタープの出番はなく、むしろ少し肌寒い海風のせいで長袖を羽織って丁度よいという、野外のアクティビティには最高のコンディションであった。

皆それぞれに波打ち際で遊んだり、浜の端を越えて岩礁地帯を進んだりと思うように楽しんでいる。ただ、除川だけはよほど普段のストレスから開放されたとみえて、昼間からアルコールをあおり続け、気がつくや砂浜の上に両手両足を広げて大の字になり、まるで漫画の一コマのようにグースカ眠っていた。地球上の生命体で唯一食物連鎖から外れ、捕食される心配がなくなったホモ=サピエンスだけが習得した睡眠法を、彼は今満喫している。

夜の帳が降り始め、暗くなる前に BBQ を始めようということになった。ちなみに今回の研修では、より個人の自主性を高めるため原則として食事は各自で責任を持って完結しようと決めていたのだが、一日目の夜だけは親睦を深めるためにも全員で BBQ をすることにしていた。

ベースキャンプの上に背後から大木の枝が張り出していたので、枝から枝へロープを渡し、そこに皆が持ち寄った LED ライトを吊るした。近頃のキャンプでは、夜の明り取りといえ、だれもが LED ライトを使用している。

ウ LED のながいながい話

ところで私は、知る人ぞ知る LED ライトマニアだ。今から 15 年ほど前になるだろうか、生まれて初めて白色 LED の懐中電灯に触れたとき、そのエポックメイキングな製品から

受けた衝撃を今でも鮮明に覚えている。

あれは鹿児島から滋賀県に就職した二つ違いの弟が、夏の盆に帰省してきて、日吉町の、のどかな里山にある祖父母の家に親戚一同が集まった日のことだ。

「兄ちゃん、今からカブトムシ捕りにいこうや！」

滋賀に拠点をもち、すっかり関西弁になった弟が、虫捕りの準備を整えながら聞いてきた。

私も弟も昔から虫捕りが大好きで、一家で田舎に帰省したときは二人で恒例行事のように里山を歩く。クヌギが鬱蒼と茂った雑木林に入り、樹液の醗酵した甘酸っぱいにおいを胸いっぱい吸い込む。都会で快適な生活を送っているはずなのになぜか疲労した心が、一気に癒される。里山には、この瞬間のために毎年帰省しているといっても過言ではないほどの気持ちよさがある。

「実はな、ええものがあんねん。」

蝉の声が五月雨のように降る薄暗い林の中で、弟がポケットからおもむろに何かを取り出した。それが、初めて見る LED の懐中電灯だった。弟はそのライトを使って木のうろや樹皮の隙間に潜むクワガタを次々と引っ張り出し、持参したクッキーの空き箱は瞬く間にいっぱいになった。虫はさておき私が驚いたのは、まずその LED ライトの明るさだった。およそこれまでのクリプトン電球では得られない爆明が、真っ暗な木のうろの中を昼間のように照らす。そして次にその色味だ。これまでの懐中電灯は、いわゆる電球色という、オレンジがかった光だったのだが、その LED ライトは、青白いほどに真っ白だった。これまでの電球式の懐中電灯では何が問題だったかといえば、照らし出されたものがトンネルの中よろしく、全てオレンジ色に染まって見えてしまう。しかし、LED ライトでははっきりと対象物の色を見て取ることができる。そんな光が、手のひらに収まるほどの小さなライトから放たれる。しかもほとんど熱を発しないので電池の持ちが格段によく、 unnecessary 紫外線も出さないから虫が寄ってくるのがほとんどない。おまけにフィラメントがなく、「切れて」壊れることもないので長寿命だ。後年、はじめて iPhone を手にした時も、ついにドラえもんの道具が具現化したかと感涙が頬を伝ったが、LED ライトの衝撃はそれに匹敵するものだった。

「絶対、兄ちゃん気に入ると思ったわー。実はな、会社の暗い倉庫の中で製品管理の仕事をするときにこのライト使ってたわ。オレも初めて見た時はびっくりしたわー。すぐに調べて同じもの買うてん。」

それはドイツのレッドレンザーというメーカーのライトだった。確かに上品に作り込まれていて、アルミの削り出しの筐体は iPhone のような完成度と機能美を備え、かつ剛健性を併せ持っていた。日本のライトが優等生のカラーなら、レッドレンザーはまさしく気品に満ちたベンツの作りだった。それまで、米マグライト社のマグライト一択だった私は、手のひらを返したかのようにいろいろなメーカーの LED ライトについて調べ、ランタン、ヘッドライト、マグネット式など、用途ごとにいくつもの製品を買い揃えた。おかげで今では、本当に活動の幅が広がった。夏は LED 片手に夜な夜な手長エビを捕りに出掛けるので、隣家の小菌はそのうち手長エビが絶滅危惧種になり、大富先生はそのうち捕まって剥製にされて、「手長エビを絶滅に追いやった人物」として奄美博物館に永劫展示さ

れるのではないかと憂いている。

ところで私は、昨年秋、埼玉県にある日本工業大学の学校説明会へ出張で出かけた。その説明会に是が非でも行きたいと手を上げたのは、その日の午前中に記念講演があり、講師が白色 LED(正確には青色 LED)の生みの親にしてノーベル物理学賞受賞者の中村 修二博士だったからである。ノーベル賞がこの世にあまた存在する賞の中でも一二を争う権威ある賞であることは説明するべくもないが、例えばニュートリノに質量があったとか、クラゲから蛍光たんぱく質を取り出したとか、土の中からイベルメクチンを見つけたといわれても、誤解を恐れずに言えば、今の自分にはまったく関係がないのである(間接的には大いに関係あるが)。しかし、白色 LED の発明は直球ど真ん中で、今の自分の毎日の生活に寄与してくれている。おこがましいことだが、私は常々、中村 修二先生にお会いして、できるものなら自分の口で直接お礼が言いたいものだと、夢物語に考えていた。そのあくまで夢だと思っていた物語がまさしく今、思いもかけず手の届くところにやってきたのだ。聴講もせぬ前から捕らぬ狸の皮算用で、私は講演最後の質疑応答で、真っ先に挙手してお礼を言おうと企んでいた。漠然とではなく、絶対にお礼を言うんだと決めていた。そして事はついでだ、更に氏の心に響くような、機知に富んだ質問もしてやろうと、頭の中は常にそのことを考えていた。

ちなみに話は更に逸れるが、今から 14 年前、私が今はなき高山高等学校で数学の教鞭をとっていた時のことだ。授業中に生徒から質問があった。「先生、次のノーベル賞は誰が受賞しますか?」「それはねー、とても予想が難しいんだよ。毎年、いろんな人が受賞者の予想をするんだけど、それまで一般にはほとんど名前を知られていなかったような人が、急に日の目を見たりするから…。でもね、これだけは必ず言える。青色 LED を開発された中村修二さんという人がいるでしょう。あの人は必ずいつかノーベル賞をとる。それくらい、我われの“明かり”は変わったんだ。」「いつとりますか?」「ノーベル賞はね、傾向として成果を出してすぐには受賞しないんだ。まあ、最低でもあと 10 年かかるかな。」

授業でそう話したきっかり 10 年後の 2014 年、中村先生はノーベル賞を受賞された。あのときのクラスでこの時の話を覚えてくれている生徒はいるだろうか。

さて、講演当日。開演の一時間前には会場入りし、中村先生の表情までしっかりと見てとれる最前列の席を陣取った。会場の体育館は、瞬く間に千人以上の聴講者で満員になった。お話の内容は本当に興味深く面白いもので、講演の 90 分間、本当に始めから終わりまでメモをとるペンはまったく休まらなかった。講演が終わり、学長によるお礼のことばがあり、続いて司会が口を開いた。「それでは、質疑応答の時間に入ろうと思います。せっかくの機会でございます。どなたかご質問等のあられる方はいらっしゃるでしょ…」司会が言い終わらぬうちに、自分を含めた三名ほどが、ほぼ同時に手を上げた。邪推かもしれないが、恐らくは自分と志を同じにするライバル達だ。「では、一番早かったそちらの方…」と言って、アシスタントが三列ほど後ろの人へマイクを持っていく。権威ある講師の特別な講演の後、これだけの聴講生の数だ。会場には物音一つしない空気が張り詰めていた。誰がどんな質問をするのかと、会場中が固唾を呑んで彼を見つめる。「…先生の好きな食

べ物は何ですか？」会場がドッと沸いた。沸いたが、今この瞬間、そんなことを聞いてどうする。いやしかし、自分よりも先んじて挙手したその勇気と行動力に、今は彼を賞賛しよう。中村先生が「・・・ラーメン。」とだけ答える。「何ラーメンですか？」「味噌ラーメン。」かくして、彼のターンが終わった。「では次に手を上げられた、一番前の方・・・」と言われ、いよいよ自分にマイクが回ってきた。「本当に興味深く楽しいお話をありがとうございました。おかげさまで、毎日の生活で LED ライトを使わせていただいています。本当にありがとうございます。」中村先生は、にこやかに笑ってくださった。



「それで、中村先生は高校時代、物理がお得意で大好きだったにもかかわらず、高校の先生がそんなのでは食っていけないから大学では工学部に行けといわれ、半ば強制的にそちらの道へ進学させられたとのことで、青色 LED を開発されノーベル賞まで受賞されたにもかかわらず、冗談半分、今でもその先生のことを恨んでいるとおっしゃっていましたが、ではもし、そのまま物理の世界へ進まれていけば、今どんなことをして、どのような人物になっていたと想像されますか？」

これまでにない面白い質問だと思ってくださったのか、中村先生は輝かせ、「そうですね... 私は宇宙の分野が好きですので、生涯に渡って、宇宙方程式に携わる生活を送りたかったです」といったようなことを、饒舌に答えてくださった。

敬愛する中村先生に面と向かって、自分の言葉でお礼を伝えるという長年の夢が、今まさにこの瞬間に成就した。その日一日、私の頬は満足に紅潮したままだった。

エ 前門の虎 後門のハブ

閑話休題。

昼間のように明るい LED ライトの下で、私たち七人は BBQ に舌鼓を打っていた。昼間からコンスタントに酔っ払っていた除川が、急に口を開いた。「せっかく無人島で焚き火を囲んでいるのだから、Y 談しよう！まずは、一人ずつ、これまでで一番最高だったデートの思い出から！」おいおい、京大・法の頭の中身は中学生の修学旅行なのかと心の中で突っ込んだが、私は彼のその落差が大好きだ。話の内容について書けるわけもないので紙幅の都合上という理由で割愛するが、とにかく皆で大いに盛り上がっていた、その時だった。「うわーっ！」遠くのほうから、小便にたっていた小菌の叫び声が聞こえる。何だなんだ？駆けつけるとそこには目を疑いたくなる光景があった。先に述べたとおり、この日は満潮の大潮の日。満潮の時刻に近づき、なんと全員の特製の寸前まで、波が打ち寄せていたのだ。その距離は残り 1 メートルほど、特に浜の一番端に陣を張った小菌のテントにはあと 50 センチというところまで、波が迫っていた。背後の山ぎりぎりまで寄せてテントを張っていたので、全員これ以上、上に逃げることはできない。前門の虎後門の狼の諺が頭をよぎるが、今はさしずめ後門のハブだ。果たして、これ以上潮は上がってくるのか。この日の潮汐表はスマホで調べられるが、載っているのは主要港である名瀬港の時

刻である。遠く離れた無人浜の正確な満潮時刻を知ることはできない。皆、不安を抱えながらの就寝になった・・・が、よくよく考えた上で、私は安心して眠ることができた。というのも、もしこれ以上潮が満ちてくれば、真っ先に沈むのは小菌だ。そうなれば彼は悲鳴を上げて飛び起き、皆を起こしにかかるだろう。つまり危険予知の自動アラームのようなものだ。そして、身を挺して危険の最前線にいる彼は、もはや炭鉱のカナリヤである。というより、むしろ彼は自らの運命を悟ったかのようにカナリヤ役を買って出ている。

本当に彼は、事実上のサブリーダーだった。

オ 仲間が欲しい

気温・湿度とともに最適だったこともあり、記憶がないほどの深い眠りから覚めた。よくよく考えれば、本来の炭鉱のカナリヤは有事があれば騒ぎ立てることなく静かに逝くんだったと気づき、真っ先に一番奥のテントを確認したが、彼のアイコンでもあるモンベルのムーンライト I 型は、昨夜と変わらぬ姿で鎮座してくれていた。潮は昨夜とは打って変わって 10 メートル以上も引き下がり、アクティビティに適した広大なグラウンドが広がっている。気持ちのよい二日目の朝だった。各自思い思いに朝食を済ませ、自己研修という名の海遊びが始まった。このために荷を増やしてまで持ってきた、インフレーター SUP を膨らませる。今回のキャンプでは打ち合わせの段階から、小菌が「装備はできるだけミニマムなスタイルで行きましょう。目安として 1 人ザック 1 つで。」と提案していたが、この SUP だけで、人一人がゆうに入れるほどの大きさのバッグであり、目安は無実化していた。

SUP とは、StandUp Paddleboard の略で、「サップ」と呼ばれる。今から 10 年以上も前にハワイで誕生したマリンスポーツなのだが、日本で流行し始めたのはここ数年のことである。形状は、サーフボードが一回りも二回りも大きくなったようなもので、サーフィンが波の上を滑るようにして楽しむのに対して、SUP は波のない穏やかな水面でその上に立って、パドルで漕ぎながら海面をまるで散歩するように楽しむスポーツである。特に奄美では島を囲むように「礁縁」が発達し、干潮時には「礁池」とよばれるまさに池のような穏やかな海面が広がるので、SUP の魅力を堪能するのにうってつけだ。簡単に沖に出られるので、SUP があれば誰でも気軽にさして濡れることもなく珊瑚礁や熱帯魚に会いに行くことができる、そんな夢のような道具なのである。ちなみに奄美を離れて鹿児島本土に戻っても、そこには錦江湾という大きな池がある。事実、錦江湾では SUP がレジャーとして盛んに楽しまれている。つまり何が言いたいかといえば、皆さん、SUP を手にしてみませんか、ということだ。SUP はパドルやライフジャケットなど必要なものを揃えて 1 セットで 10 万円前後と、少々勇気のいる価格帯だが、安いものは 5 万円くらいから入手可能である。レンタルすれば 1 回 1 万円くらいはかかるから、何回も遊ぶことを考えれば十分に元は取れる。興味はあるけれど、そもそも SUP の扱いがよく分からないという人は、シーズンになれば「アマニコ」というマリンサービスが朝仁海岸で毎月 1 回のペースで無料 SUP 体験を実施しているので、気軽に足を運んでみるといい。私もこれに 4・5 回はお世話になり、SUP をほぼマスターした上で、改めて購入するに至った。ただ、無料体験は当然のことであるが、危ないという理由であまり沖までは行かせてもらえないし、朝仁の海

しか味わうことができない。しかし自分で所有すれば奄美の海のどこへでも、自分で進んでいける。簡単に言えば、奄美大島をぐるっと一周することだって可能だ。SUPがあれば、楽しみが増える。楽しみが増えれば生活が変わる。生活が変われば人生が変わるのだ。SUPに少しでも興味が出れば、まずは大富まで声をかけてほしい。・・・というのも、SUPは一人でも楽しいが、やはりドライブやキャンプ等と同じく、みんなでワイワイやりながら遊ぶのが楽しいのだ。くどくど書いて申し訳ないが、つまり私は、SUP仲間が欲しいのです。

カ 研修も終わりに

そのSUPに乗って、天皇浜の沖へ繰り出す。始めて出会う海、そこにはどんな珊瑚礁が広がり、どんな生き物に出会えるのか。初めて訪れる街を歩くのも大好きだが、それと同じ感覚である。

それと同時に、他のメンバーはシュノーケリングを楽しんでいるので、名ばかりリーダーとはいえ、即席ライフセーバーとなって海上から全員の安全を監視する。誰かが溺れてもすぐそこにSUPという陸があるので心強い。

飯山は、このキャンプに合わせて購入した防水カメラ、オリンパスのSTYLUS TG-4 Toughで嬉々として水中写真の撮影を楽しんでいる。実は私も同機種に食指が動いていたのだが、最後は価格の面で断念した経緯があり、うらやましい限りである。

かなり沖のほうを、除川が一人で泳いでいる。戻ってきた後何があったかと聞くと、泳ぎながら大きい用を足してきたとのことだった。彼のおこなったアフリカのカバ排出方式も、一般の海水浴場ではできない芸当だ。見つかったらつまみ出されるだけでは済まないだろう。無人島の研修だからこそ可能であり、一生の思い出に残るはずだ。

皆、上半身にラッシュガードを着ていたが、大谷は持ってくるのを忘れたらしく、代わりに下着にしていた白のエアリズムを着て泳いだ。体が冷えたと言って途中で焚き火に当たりにきたが、水に濡れたエアリズムは半透明スケスケになり、体にぴったりと張り付いていて下の肌がありありと浮き出ている。その姿は寺の跡取りだけに新たなUMA海坊主を彷彿とさせたが、一緒に焚き火に当たった清水はよく耐えたものだ。

海はいつまでもキラキラとしていた。昼過ぎにはこの浜を去らなければならない。誰とはなしに、皆荷物をたたみ始め、昨日船が着いた岩場まで荷物を運び始める。小菌がソリの上に荷をくくりつけ、砂浜を引きずっている。デジャビュかと思ったが、一年前、確かに見た光景だった。

二日間のキャンプを終え、我われは『ザ・ビーチ』のディカプリオの如く、浜での生活を忘れ日常の生活に戻っていた。

学校の廊下で除川とすれ違った際、「酔っ払ってY談Y談って言ってたな！」と突っ込んでみたが、除川は「え？え？何？」と全く記憶にないらしかった。繰り返すが私は彼のこの落差が大好きである。

今年もハンミヤに上陸する夢は叶わなかったが、天皇浜も十分に魅力的で、新たな出会いをもたらしてくれた。それに、前向きに考えればあと一年、ハンミヤ島を訪れるという楽しみを抱き続けることができる。

来るべきその日を夢見て、さしあたり向こう一年間、公私ともに精進していくことに決めた。

来年（次号紀要）こそは、ハンミヤ島奇譚を！

(2) 気軽な水中撮影の実践とほんの少しの考察（飯山 清文）

ア はじめに

今年度、念願叶って「奄美ならでは研修」に同行することが許可された。この2日間を振り返ってみると、どの場面を切り取っても有意義であり何事にも代え難い濃密な時間を満喫することができた。今回の研究紀要の執筆に当たり、他の研修参加者と重複する部分も多いと思い、アクティビティとして個人的に一番楽しみにしていた、シュノーケリングでの水中撮影について主に述べてみたい。

イ カメラへの思い

現在、デジタルカメラの出荷台数がフィルムカメラのそれを逆転してから15・6年ほど経つと言われ、スマートフォンやタブレット端末で誰でも手軽に高画質できれいな写真を撮影できる、まさに1億総カメラマンが「インスタ映え」を狙う時代になった。見たもの全てをそっくりそのまま絵にしてくれるカメラは、幼少の頃より絵心が皆無な私にとって『魔法の道具』であり憧れの存在だった。経済的に自立したことをきっかけに憧れの『魔法の道具』に手を出したが最後、その魔力（＝誰でも綺麗な絵が撮れるメーカーの技術力）に完全に取り憑かれ、フィルムカメラからデジタルカメラへの過渡期を過ごした20代の頃は、「もっといい道具でもっといい絵を」と、散財しかけたこともあった。

日々性能が進歩するカメラとレンズ、そしてそれらに付随する数々の撮影機材に対する所有欲は、家族を養っていくという責任が生じた日から必死に押し殺してきたつもりだったが、奄美大島に赴任し初めてシュノーケリングを体験したのをきっかけに、心の奥底に押しえ込んでいたはずのものが、堰を切ったかのように溢れ出す。神秘的でどこか宇宙的なものを感じさせる海の中で、色とりどりの珊瑚や個性的な魚の群れを目の当たりにした時、「いいねの獲得」が目的ではなく、ただただ単純に「見たもの、感じた世界を写真に残したい。それができる機材が欲しい。」そんな衝動に駆られたのは自然なことだった。

ウ 機材について

プロフェッショナルの水中カメラマンに言わせると、「水中でいい写真が撮れるかどうかは、スキューバダイビングの技術がしっかりと身についているかどうかが大半を占める。」らしい。そんなものなの？と思ったが、スキューバ機材を購入するにも費用が掛かりすぎるため、今回はシュノーケルと水中メガネでの素潜りによる撮影という選択肢しかなかった（そもそも個人でスキューバ機材を所有している普通のサラリーマンがどれほどいるのか疑問だ。仮に奇跡的に所有していたとしても、かなりの荷物になるた

め今回の「奄美ならではの研修」には持参できなかった)。

撮影機材として元々、デジタル一眼レフカメラとデジタルミラーレスカメラを所有しているが、当然ながらそのまま使用することはできない。これらのカメラで水中撮影を行う際には、ハウジングと呼ばれる専用の防水ケースに入れて撮影するのが一般的だが、このハウジング、一眼レフ用は数十万円、ミラーレスカメラ用でも十万円は下らない。夢の水中撮影を実現するために、ハウジングを購入するか？防水機能付きコンパクトデジタルカメラを購入するか？両者を天秤に掛けた結果、一瞬家族の顔がよぎったため、圧勝で後者に軍配が上がる。そこから、インターネット上でカメラの物色が始まる。一言で防水機能付きコンパクトデジタルカメラと言っても、各メーカーから様々な機種が販売されている。価格もピンからキリまでだ。そんな中、費用は掛けられないがある程度の画質や機能にはこだわりたいと、財布の中身を気にしながら熟慮に熟慮を重ねた結果、OLYMPUS 社製の STYLUS TG-4 を購入することに落ち着いた。もちろん家族には内緒である。

エ 実践

「奄美ならではの研修」2日目午前10時、スキューバ機材もハウジングに搭載した一眼レフカメラも、ましてやウエットスーツ・足ヒレすらも無い、あるのはシュノーケルと水中メガネ、ラッシュガードにマリンシューズ、そして防水機能付きコンパクトデジタルカメラのみという、本来の水中撮影装備としてはほど遠い、ほぼ丸腰に近い状態でファーストアタックを試みた。

南国奄美とは言え11月の海はやはり冷たい。おまけに沖からの風の影響で海中も流れが速く、シュノーケリングには向かない条件が重なっていた。普段だと水の冷たさと寒さに心折れ、早々と海から引き上げているところであるが、「せっかくカメラを購入したからには、使わないともったいない。」という貧乏性的発想がそれをさせない。被写体として狙うは南国を感じさせるクマノミの仲間やチョウチョウオの仲間。まずこれらの魚を探して泳ぐ。海岸から10mも離れないところで、珊瑚礁と多種多様の魚たちが現れた。海面から様子をうかがいながら、珊瑚の上を泳ぐ魚を覗き込む格好で撮影するが、カメラの液晶モニターは海水のゆらぎと水中メガネの乱反射で見えづらく、被写体にピントが合っているか確認することすら困難だった。しばらくすると、枝状の珊瑚の上に濃い青色の小さいスズメダイの仲間が群れているのを見つけた。潜水しゆっくりと近付いてカメラを構えようとするも素早く逃げられる。近付かない代わりに光学ズーム機能を使うが、潮の流れで体が安定せずフレームに収めるのが難しい。さらに枝状の珊瑚付近の検索を続けていると、目当てのチョウチョウオの仲間が目の前を通過。木の葉のような薄いボディーに鮮やかな黄色と薄青色のラインが珊瑚の海に映える。ここぞとばかりにシャッターボタンを押そうとするが、ボタン半押しでピントが合っているかを確認している間にフレームアウトしてしまう。魚の動きがまったく予測できず、撮影は容易ではない。続いて大きな丸い珊瑚に沿って3mほど潜ってみる。するとツノダシが現れた。南の海が似合う独特な菱形のフォルムと優雅になびく白く長い背びれ、黄色と黒の縞模様のコントラストが美しい。潮の流れに逆らいながら必死に追いかけるも、

数回シャッターを切ったところで、息が続かず追跡終了。撮影をするどころか泳ぎ回るのが必死になり体力と体温が奪われていった。

一度海からあがり焚き火で暖をとるが、冷えた体に風が当たり小刻みに体が震え止まらない。海中の方が温かく感じた。15分ほど経っても状況は変わらず、風に当たるよりは海中がマシと判断し、セカンドアタックを試みる。

潜る場所を移動し被写体を探す。珊瑚の陰につがいと思われる1対のクマノミを発見。クマノミは一箇所にとどまろうとする習性があるのか、一度逃げてもしばらくすると同じ場所に戻って来るように見えた。これは頑張ればシャッターチャンスが得られるかと、潜る→逃げられる→海面でしばらく待つ→戻ってきたらまた潜ることを数回繰り返してみた。このクマノミを狙って、2回目に潜ったときからピントが合っているかを液晶モニターで確認することなく、OLYMPUS社のコンティニューオートフォーカス(C-AF:シャッターボタンを半押しすると、その間ずっと撮影範囲の中心でピントを合わせ続ける機能)の精度と、自分の感覚を信じて、数多くシャッターボタンを押す撮影方法になっていた。まさに「数打ちゃ当たる」。デジタルカメラの利点を最大限に使っていた。しかし、クマノミの正面には回り込めず、愛くるしい表情を収めることはできなかった。しばらく海面にぶかぶか漂っていると、黒っぽいカワハギの仲間がその細い口で海底付近をつついていっているのを見つける。2mほど潜って、ここでもモニター確認なしで数枚を撮影。だいぶ感覚をつかんできたのか、これは意外といい絵が撮れた。その後も被写体を求め繰り返し潜り続けたのだが、トータルで1時間ほど撮影を行ったところで、さすがの貧乏性も冷え切った体に限界と生命の危機を感じ、撮れ高に満足できないまま海から上がった。

オ 撮影の成果

白黒印刷のため色合いが伝わらないのが残念である。

※印刷に合わせて、多少の色補正とトリミングを施している。



ミスジチョウウオ①



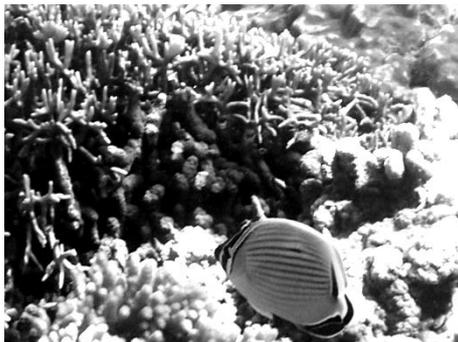
ツノダシとクラカオスズメダイ



トウアカクマノミ



クラカオスズメダイ



ミスジチョウチョウウオ②



カワハギの仲間

カ 考察

(ア) 撮影時季に関して

水中撮影をする時季は寒くない季節がベストであることは言うまでもない。何時間でも海に入っていられる時季だと撮影の時間は何倍にもなり、その分シャッターチャンスも各段に増えていたと思われる。今回は完全に時季から外れていた。

(イ) 撮影方法に関して

私の知っている水中で撮影された魚の写真は、ほぼ100%がスキューバ機材と高価な撮影機材を使用してプロカメラマンが撮影したものだ。しかし今回は素潜りでの撮影ため、一度の潜水でどう頑張っても1分弱しか潜れない。当然ながら、一箇所にとどまり被写体を待ち構え、じっくり撮影するという方法は不可能だった。そのため被写体をフレームに収めることが精一杯で、背景まで気を配ることまでできず、ほとんどが被写体を斜め上後方から捉えたものになってしまった。この問題の解決策として、海中で体を安定させるために潜水の練習をしたり、少しでも長い時間潜っていられるように肺活量を鍛えるトレーニングを積んだり、更に魚の動きを読む力を身につければ、被写体の正面に回り込め、背景を含む構図もしっかりとしたより良い絵が撮影できると思われる・・・が、プロの撮影技術とダイビング技術には到底及ばない。プロのあの言葉が胸に刺さる。

(ウ) カメラ操作・設定等に関して

海中では陸上と同じ感覚での撮影はできなかった。当然である。レンズと被写体の

間には「空気」ではなく「海水」が存在するため、光の屈折率が異なり実際より大きく写り込むので、広角で撮りたい時にフレームに入りきれなかったり、光の透過性の影響で色の再現性に違いが出たり、さらには舞い上がった砂が写り込んだりする。これらの撮影条件の違いをあらかじめしっかりと理解しておく必要があった。色の再現性を考えると、実際に目で見えている海水はほぼ透明だが、撮影した絵を見てみると、ほんの少しだが全体的に黄緑から緑の色が差したようにぼやけてしまう。そこで、ホワイトバランスを「オート」から「水中」に設定し直すことで、青色が少しだけ強調されすっきりと表現することができた。一般的なカメラにホワイトバランスの「水中」モードは搭載されていない。さすが、防水機能付きカメラだ。ただ、陸上にてこの「水中」モードで撮影してしまうと、青色が強調され過ぎてしまうため、ホワイトバランスのモード設定はなかなか煩わしい。そこで水中撮影を行う際は、設定変更等のカメラ操作を極力無くしたり設定ミスをしったりしないように、「RAW+JPEG」で撮影し、パソコン上でホワイトバランスを調整し自分好みの色に現像すればよいと思われる(デジタル万歳!)。カメラによってはこの「RAW」での撮影ができない機種もあるが、今回購入したカメラにはその機能が搭載されている。機材選びの際にこだわりを持ち、悩みに悩んだ上で購入した甲斐があった。色の再現性に話を戻す。赤色の被写体を撮影した場合は、暗くくすんだような赤になってしまう。そこで内蔵ストロボを焚いてみると赤色がはっきりと表現された。しかし、被写体との距離が1 m以内だとその効果が見られるのだが、被写体との距離が開きすぎるとストロボの光が被写体に届かなかったり、海中の浮遊物にストロボの光が反射し丸い気泡のように写り込んでしまったりするため、赤色の被写体を撮影する際には極力近づいて行う必要があると思われる。

(エ) 撮影全体をとおして

今回の研修が計画された時からそれなりの予習と準備をしたつもりでいたが、実際に撮影してみるとうまくいかないことの方がほとんどで、「知っている」と「やったことがある」の違いを痛感した。やはり思い通りの絵が撮れるようになるには、まだまだ時間と経費がかかりそうだ。それでも慣れない撮影環境の中、数は少ないが被写体がフレームにしっかり収まっているとテンションが上がる。難しい条件だからこそ、どうにかして写真に収めることができなかつと挑戦したくなるし、また、さらによい機材も欲しくなる。カメラにはそんな恐ろしいまでの魅力が詰まっていると改めて感じた。

キ 最後に

日本語で「学校」を英語に訳すと「school」になる。この「school」の語源はギリシア語の「scholē」に由来し、それは「暇つぶしのための時間や場所」すなわち「余暇」を意味する言葉であるというのは知られた話である。

『余暇を活かして人生を学ぶ場所が学校である』そんな都合のいい解釈をし、「遊びに行くんじゃないよ！研修なの！勉強に行くの！！」と半ば強引な説明で家族を説得し、今年度の「奄美ならではの研修」に参加した。この2日間、日常を抜け出し非日常を体験する中で、人生を豊かにするための時間を過ごすことができた。本当にすばらしい学校

だった。改めてこの期間を共に過ごした6名の職員と、研修への同行を許可してくれた家族に感謝したい。

(3) 無人島キャンプを体験して（大谷 泰行）

ア はじめに

「無人島キャンプをする」という話を小耳に挟み、新参者（今年の4月に赴任）ではあったが、是非とも参加をしたいと申し出て、参加することとなった。私は田舎育ち（出身は伊佐市）である。大学進学のために京都に行くまで、山でウンベ（ムベ）を採って食べたり、川で魚を釣って、その場で焼いて食べたりと自然を満喫していた。また、父が阿久根の出身ということもあり、魚を釣ったり、磯遊びをしたりすることも好きであった。そのため無人島キャンプの話は、大変魅力的であった。

イ 出発まで

当日まで、数回の会議を開き、持って行くものや役割分担等を確認した。ガスバーナーやテント等、持っていないものも多かったので、買い揃えなくてはならなかったが、無人島でのことを想像しながら買い物をするのは、非常に楽しかった。小学生の時、遠足の前日にお菓子を買ったり、必要なものをリュックに詰めこんだりした時のようであった。そして、あまりのうれしさのため、夜は眠れずに、そのまま集合場所へ向かうこととなった。まさに小学生である。

ウ 1日目①（学校 → 港 → 鳥瀬）

学校に7:30に集合し、数台の車に荷物を詰め込んだ後、正門で集合写真を撮った。その日は風が強く、このままではハンミヤ島へは上陸できない場合もあるが、現場に行ってみないと分からないとことであった。「なんとかならないかな。」と祈りながら移動した。港に着くと船に荷物を乗せた。無事に出港したが、港を出ると風が強くなった。乗り物酔いに弱いので、しっかりと薬を飲んできたので、船酔いはしなかったが、風と風に乗って船の中に入ってくる波しぶきのせいで、非常に寒かった。「どうしても行ってみたい。」と皆思っていたが、強風と荒波の影響でやはりハンミヤ島へは行けないということとなった。さらに昨年行った江仁屋離れにも上陸できないということで最終的に、加計呂麻の西端にある天皇浜（正式には鳥瀬）というところでキャンプをすることになった。岩礁に船を着け、荷物を下ろした。重い荷物（特に20kgの水）を持ち、岩場や砂浜を歩くのは、ちょっとしたトレーニングであった。

エ 1日目②（テント設営 → 夕食）

船にいた時から気になっていたのだが、岩場の頂に石碑が建っていた。男性陣は岩場へのアタックを開始した。「あの石碑はいったい何なのか。」好奇心が体を動かす。頂にたどり着き、石碑を見ると『聖上陛下 臨 御 之地』とあった。「今上」という言葉は、知っていたが、「聖上」という言葉は初めて見るものだった。後日調べてみると「聖上」は在位中の天皇を示す呼称で、「今上」と同じ意味を持つことが分かった。さらに、

なぜこの場所にこのような石碑が建っているのか調べてみると、『瀬戸内町誌 歴史編』に、昭和2年の奄美大島行幸の際に、8月7日の午後2時半、昭和天皇は伝馬船に乗り移り、実久村鳥瀬崎付近で自ら箱眼鏡で海中をのぞいて潜水夫に指示し、動植物を採集したという内容の記述があった。海の生物が好きであり、生物学者として海洋生物や植物の研究にも力を注いだ昭和天皇ならではのエピソードではないかと思った。

ベースキャンプはついた岩場からかなり歩いた場所となった。まず、砂を掘って石を積み、かまどをつくった。夜のBBQのためと暖をとるために必要であった。燃料は、流木を拾ってきて利用をした。着火方法はマグネシウム合金の火花を用いたものであった。初めて見るものであったので、大変興味深く観察をした。その際、たばこを吹かしながら見ていたのだが、たばこの着火方法はライターであった。その後テント設営をしたのだが、風が強くなかなかうまく張ることができなかった。結局、みんなで協力して張ることになり、2人から3人で1つのテントを張った。

テントを張り終わると、昼食の準備をした。カップラーメンしか持ってこなかったのだが、バーナーのデビューであったので、それなりに楽しかった。ガスボンベを装着し、点火すると勢いよく炎が上がり、程なくして湯が沸き、カップラーメンを食べることに成功した。その後は夕食までなかったのだから、たばこを吸いながら海を見ていた。贅沢な時間の使い方だと思った。ふと岩場を見ると、潮が引いていたので、磯遊びをしようと思い、岩場へ向かった。潮だまりには、キモヒトデやシラガウニなど多くの生物がおり、見ていて楽しかった。そして、トコブシのような貝もいた。磯にいたので、イボアナゴではないかと思われたが、専門家ではないのでなんとも言えない。見つけると急いでテントに貝取道具を取りに行った。人数分（7人分）見つけたいと思い、数名で探したところ、なんとか目標を達成することができた。テントに戻ると、軽く水で洗い、そのまま網に焼いた。調味料は何もつけなかったが、非常においしかった。「採ったものをごちゃごちゃ味付けせず、そのまま食べるのが一番うまい。」という父の言葉が思い出された。貝を食べると酒も飲みたくなり、まだ空は明るかったが、持ってきたウイスキーの小瓶に口をつけた。海外の映画で見る風景に憧れて今回持ち込んだのである。ひとしきり飲んだ後、夕食の為にみんなで薪を集めた。

暗くなる前にライトの準備をし、その後、BBQを始めた。次々と出てくる肉に舌鼓を打ち、すぐに満腹となった。食べているときもそうであったが、食べ終わった後の会話も大変盛り上がった。普段は近くにいても、それぞれ仕事があるのであまり話す機会はなかったのだから、非常に楽しかった。「近頃じゃ夕食の話題でさえ仕事に・・・」という歌詞の世界と真逆のものであった。普段がどれだけ、パソコンやスマホやらで会話が少なくなっているかということを感じた。夜も遅くなり、明日のために寝るべきなのだが、この時間をまだ楽しみたいということもあり、みんな起きていた。数名は、潮が引いたので貝を捕ってくるかと岩場に向かった。特にすることもなかったのだから、私も少し遅れて岩場に向かった。すると、ジンガサ（ベッコウガサ。陣中で足軽・雑兵などの下級の武士が兜かぶとの代わりにかぶった笠に形が似ているので陣笠と呼ぶ地域もある。）がおもしろいように採れた。まだ、焚き火のところにいる者のびっくりする顔を見ることが、称賛の声を聞けることを楽しみに帰ると、もう誰もいなかった。少し悲

しくなったが、採ってきたものを網に乗せ焼いて食べた。その後、それぞれのテントに入った。

オ 2日目（鳥瀬 → 学校）

明るさと波の音で目が覚めた。何時だろうと思ったが、いつも時計代わりをしている携帯は車に置いてきたので時間は分からない。何にも縛られず、キャンプを楽しみたいという思いから置いてきたのだ。かつて、「俺は縛られたくないんじゃ。」と酔っ払って鴨川に携帯を投げ捨て、翌日顔が青ざめていた友人のことを思いした。明るくなったから起きるといふ平安時代の人のような感覚でテント出た。何人か既に焚き火の周りに座っていた。私も少しぼーとしてから、お湯を沸かした。作ったのはカップラーメンであったが昨日よりは手際がよかったような気がした。その後、気温が上がるのを待ち、海に入った。浜から見たエメラルドグリーンで、透明度の高い海は、当然のことながら潜っても綺麗であった。ほんの少し沖にせるだけで、珊瑚礁が広がっていた。色とりどりの魚が群れで泳ぐ光景は本当に美しいものだった。魚たちは警戒心が薄いのか、近づいても全く逃げなかった。そのおかげで、近くで観察することができた。一番うれしかったのは、ニモ（カクレクマノミ）を見られたことだ。見ていて全く飽きることがなかった。帰る時間もあるので、泣く泣く海から上がり、焚き火に当たり体を温めた。その後昼食の準備をした。昼食を摂り終え、帰る時間がやってきた。昨日同様、強風のためテントをたたむのも苦労したが、協力し合うことであつという間にテントの撤収も終わり、焚き火の消火もした。焚き火に水をかけると、「ジュー」という音をたて、火が消えた。帰るんだなと淋しい気持ちになった。行きよりかなり軽くなった荷物を岩場まで運び、船に乗り込んだ。港に着くとすぐには学校へ帰らずに、高知山展望台へと向かった。山の上から見る瀬戸内町の街や海峡がとても綺麗だった。また、うっすらと本来行くはずであったハンミヤ島が見えていた。来年は行きたいなと皆思った。

カ さいごに

「現代人は幸せなのか。」アフリカなどの部族の生活を見るときにそのような思いに駆られる。彼らは便利なものはないけれど、いつも家族やその他の人たちと一緒にいて、一緒にご飯を食べている。ますます便利なものが増える世の中で、人と人との生の付き合いというものを大切にしていきたいし、生徒たちにも伝えていきたいと、今回の無人島での経験を通して、強く思った。

(4) 無人島で心に浮かぶもの（除川 創）

ア 「火」

火にあぶられ、網の上でトコブシたちがもだえている。竹串で突き刺し、口の中に放り込む。海の味が口の中に広がる。

仲間の他は誰一人いない砂浜。漆黒の闇に、たき火の炎が赤く浮かび上がる。秋の風が吹きつけ、それをさえぎる壁はない。体を温めてくれるのは、目の前で燃え上がるこのたき火だけだ。

火を手に入れ、人間は人間になった。つまみを回せば、肉や魚を焼くことができる。

温かい湯につかることができる。今夜、この砂浜で私に光と温もりと食べ物を与えてくれるのはこのたき火。家に帰れば、また火に感謝することのないいつもの生活が待っている。

イ 「ヤドカリランド」

砂で壁を作り、楕円形の運動場を作る。片っ端からヤドカリを捕まえ、運動場の中に入れる。ヤドカリは人の気配を感じると動きを止める。こちらも座って動きを止め、砂上を眺める。ヤドカリが動き出すのが視界に入ったら、追いかけて捕まえればいい。

ヤドカリランドのヤドカリたちは、この小さな世界を脱出しようと歩き回る。壁を越えれば外の世界に出られることを、本能的に知っている。壁の角度がより小さい場所を探し、お尻を上にして這い上がろうとする。体勢を保てなくなり、落ちる。何度落ちて、登ることをやめない。

そんなことを繰り返すうちに壁の砂が少しずつ崩れ、あと一步で脱出できそうになる。私はヤドカリをつまみ上げて運動場の真ん中に戻し、崩れた壁を建て直す。殻に隠れていたヤドカリはまた歩き始める。

打ち合わせてかたまたまか、2匹で協力しているヤドカリがいる。1匹が踏み台になり、もう1匹が後ろ足で壁の上部を崩しまくる。脱出まであと少し。私は2匹をつまみ上げて真ん中に戻し、壁を作り直す。

このヤドカリたちは、人間のようだ。壁の中に入れられ、何かを探して歩き続ける。壁を乗り越えようとする。うまくいかずに落ちる。また登る。何かに怯えて殻に閉じこもる。努力が報われるときもあれば、理不尽な何者かの手によって苦労を強いられることもある。それでも人間は動くことをやめない。命ある限り、歩き続ける。何のために生きているのか、自分でもわからないとしても。

1時間たった。そろそろ彼らを解放しよう。浜では、人間である私の仲間たちが、冷えきった体を時折たき火で温めながら、海遊びに興じている。

(5) 何もない場所の楽しみ方 (大坪 睦貴)

ア はじめに

まず、今年もこのようにして無人島キャンプに参加できることを、ここまで段取りをしてくださった先生方に感謝したい。時期は昨年よりも遅く、少し肌寒い時期だが、奄美大島だからこそできるこのイベントは多くのことを経験、体験できる。今年も昨年と同様に自然とキャンプの素晴らしさを紹介する。



イ 出発まで

出発まで数回の会議を開き、何を持って行くか、役割分担など確認した。今回は荷物を減らし、あまり贅沢にならぬよう食事も凝ったものではなく、シンプルにするということや、ガスバーナーやライトなどそろえられるものはできるだけ自分で準備し、食事は各自作るというものだった。テントと寝袋くらいしか持っていなかった私は購入することを決意したが、勝手に買うと機嫌が悪くなる人がいるので（お察しいただきたい）小菌に頼んでバーナー、ヘッドライトをこっそり注文してもらった。クーラーボックスも持たなければならない為、手提げではなく大きなリュックを準備し、厳選して荷物を詰め込んだが、心配性な私は万が一の為に何かと荷物が増えてしまった。前日はわくわくし、なかなか眠れない夜であったがいつの間にか朝がきた。

ウ 出発

学校に7:30に集合し、正門で集合写真を撮り終えた。相変わらず小菌はおばちゃん立ちだった。昨年よりメンバーが増え、楽しくないわけがないと胸を躍らせながら古仁屋へと向かった。前回のような真夏とは違い、風が強く、日差しも弱いため寒いだけではなく、このままではまたハンミヤ島へは上陸できないのではないかという不安があったが、その後予感的中することになる。昨年もお世話になった船長にお願いし、船に荷物を乗せた。前回同様小舟も積んだのだが、今回は人も多く多少の慣れがあったためスムーズに乗せる事ができた。船の水を抜くためひっくり返すと大きなカニが出てきた。これからの船出を祝ってくれているかのようだった。

無事に出発し、港を出ると更に風が強くなり、船が起こす波しぶきが風に乗って船の中に入ってくる。『寒い』、そして『濡れる』と屋根、壁のあるエリアに逃げ込んだ。そこで、今回も強風と荒波の影響でやはりハンミヤ島へは行けないという話を聞いた。

さらには前回行った江仁屋離れにも上陸が難しいと言うことで最終的に、加計呂麻の西端にある天皇浜（正式には鳥瀬）というところでキャンプをすることになった。岩礁に船を着け、荷物を下ろそうとしたが強風と足場の狭さが上陸を妨げる。特に水は20kg近くあるため困難を極めた。結局小舟は下ろすことができずそのまま港へ帰って行った。



エ 天皇上陸

やっとの事で上陸を果たすとそこには天皇が上陸した証の碑が建っていた。掘られている文字を読んでも『聖上陛下 臨 御 之地』と書いてあり後日調べてみたところ即位して間もない昭和天皇がこの場所に足を運ばれたということだった。

テントをどこに張るかということになり、着いた場所とは真逆の200m程先に張る

ということで再度大量の荷物を運んだ。夜に必要な薪を集めながらいこうということになったのだが、ここには江仁屋離れの時より大きくてさほど濡れていない流木が多く、大量に集めることができた。風の向きや潮の流れ、満潮時の海面の水位。薪を手に入れるにはこれらの条件が関係してくるのだろう。

まずはベースキャンプをと場所を決め、砂を掘って石を積み、かまどをつくった。バーベキューコンロも荷物になるということで持ち物リストから削除されたため、今回はこれで食事を作ることになる。隙間を砂で埋め完成したかまどは、かなり立派だった。その後テントを張ったのだが猛烈な風でうまく張れない。みんなで協力して張ることになり2人から3人で1つのテントを張るようにした。

一段落し食事を摂った。今まですべて頼ってきたが、今回は自分で準備する。早速バーナーのデビューだ。ガスボンベを装着し、点火すると勢いよく炎が上がり、沸騰したお湯がのとりめし(レトルト)を鍋の中でぐつぐつと温めてくれた。容器タイプのもので鍋に入りきらないと思い、わざわざ別の袋に入れ私は温めたのだが、その横で大富氏が豪快な技を繰り出している。水の状態から沸騰を待つことなく米とカレーを同時に入れているのではないか。しかもほぼ半分ご飯も顔を出している。大家族の入浴シーンのようだ。温めれば食える。食えればOK。キャンプには常識などいらぬということをまざまざと思い知らされた。

その後しばらく休息をとった。何かすることがあるわけでもない。何かしないといけないわけでもない。自由。ただ椅子に座り、海を眺める。何もしないことの贅沢を堪能した。休憩が終わるとそれぞれが三々五々行動を始めた。私はキャンプとは反対側の浜を歩いてみたが特に何もなく引き返した。すると飯山氏、大谷氏、除川氏、清水が岩を覗いている。聞くと『とこぶし』という貝がいるらしくすでに7個くらい採っていた。ベースキャンプに戻りかまどで焼いた貝は天然の塩味が効いており、身も柔らかく本当においしいものだった。その後自分でも採ってみたいと小藺と繰り出したが満潮へと動き出した海水が岩を隠すようになり見つけることはできなかった。



オ 楽しい夜の始まり

日が沈みかなり寒くなってきた。しかしこの寒い中での焚き火は火があることのありがたみをより一層感じさせてくれる。結局炭を使わずに薪でのBBQがスタートした。野菜より圧倒的に肉の量が多いBBQはあっという間におなかを満たしてくれた。同じ学校ながら職員室が違ったり、学年が違ったりとなかなかゆっくり話す機会がないのだが、ここでは学校とは全く関係のない話で盛り上がることができた。『こうい

う時間が大切だよな』と心から思う。私がまだ期限付きだった頃、ベテランの先生が『昔は職員室で生徒の話や遊びの話など、職員同士のコミュニケーションをとる時間がいっぱいあった。今はみんなパソコンとにらめっこしている』と言っていたのをふと思い出した。そんな中、特にどうでも良い話題を振る除川氏はとても元気で楽しそうにしていた。まさに『ヨケトーク』だ。というのも火が落ちる前に再度薪拾いに精を出している間、彼は2時間も昼寝をしていたのだ。他の人より元気で当然なのである。相変わらず強風の中、談笑していると波音がどんどん近づいてきている。心配になって見に行ってみると、テントまで1 m位のところまで波が来ていた。これ以上来たら間違いなく中では寝られなくなる。びくびくしながら見ていると少しずつ波が引きはじめ、結局干潮へと至った。



更に2時間くらいたっただろうか。明日も楽しむためにそろそろ寝ようかという頃、潮の引いた海を見て『今なら貝が捕れるのでは』と思い、3名を残して貝捕りに向かった。夕食前にいったときよりも岩が露出し、購入したヘッドライトのおかげできれいに岩肌が見える。昼間に食べた際に貝の色や形がある程度わかっていたためその姿を求めて搜索した。大谷氏が貸してくれた貝を捕る道具を持ち、歩いているとなにやら黒い出っ張りが…。もしやと思い顔を近づけるとそこには待ちに待ったとこぶしがいた。鉤を引っかけ岩からはがそうとすると貝も負けまいと岩にへばりつき離れようとしな。とにかく力づくでやってみるとコロッととれた。その後は次々と見つけることができ最終的には15個くらいは捕れた。これはみんなが喜ぶだろうとベースキャンプに戻ってみたが誰もおらず、喜びを共有することができなかった。さっそく網の上に置き焼いて食べてみるとやはり醤油いらすの天然塩味でとても美味であった。このおいしさを伝えたいがグルメリポーターではないのでうまく説明ができない。おいしすぎて『うまい』以外の言葉が思いつかないのだ。こうして夕食からひたすら飲んで、食べてと続けているうちに時間が23時をまわり就寝した。

カ 2日目の朝

波の音で目が覚めた。少し肌寒い中ベースキャンプには大谷氏と清水がいた。何もすることはないのでまだまだ寝ても良いのだが、少しでもこの風景を目に焼き付けて帰りたい、眺めていたいという気持ちはみんな同じなのだろう。その後1時間くらいでみんな起床し、朝食を摂ることになった。すると飯山氏がテーブルの上にペットボトルを横にして置いており、なぜ横なのか気がなってみているとどうやらテーブルの水平をとっているようだ。私ならおそらく感覚だけで適当にやっしまいそうだが、やはり手

慣れた人は多くの技を持っている。朝はレトルトのカレーとハンバーグでハンバーグカレーにすることにした。ベーコンも持ってきていたが結局切るのがめんどろになってしまったので除川氏にあげた。ただ除川氏は棒ラーメンだったので組み合わせとしては正直いかなものか。チャーシューの代わりにはならなそうだ。しかし彼曰く、うまかったらしい。横で作っていた清水はリゾットなるものを作っていた。私はカレーとラーメンくらいしか思いつかないのだが、やはり家政科で食物部の清水は一枚も二枚も上手だ。

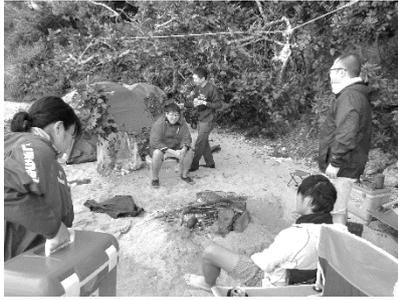


キ 天皇の海と研修の終わり

相変わらず風は強いが所々晴れ間が見えるようになってきた。せっかく来たからには海に入って帰ろうと着替え、海に入った。海水は少々冷たかったが何となく陸で風にさらされているよりは温かく感じがした。潜ってみると多くの魚がおり、ほんの少し沖に出るだけで広い範囲に珊瑚礁が形成されていた。まさに魚の住み処で、いろいろな魚が集まっている。特に青くて小さい魚はとてもきれいで見応えがある。大冨氏は自前のSUPを華麗に操り、彼一人濡れぬまま海を満喫している。私もチャレンジしたが何回やっても海に落ちてしまったので諦めた。ぷかぷか浮きながら魚を眺めていると強烈な寒さに襲われ海からあがった。他のメンバーも次々とあがってきており、えさに群がる小魚のように一斉に焚き火を囲んだ。しかし、小菌と大谷氏はその後も海と遊んでいた。今思えば大谷氏と除川氏は釣り竿ともりを購入していたが一度も使っている姿を見ていない。あまりの海の綺麗さと魚のかわいらしさに使う気も失せたのだろう。

昼食を摂り終えいよいよ片付け、帰る時間がやってきた。強風のためテントをたたむのも苦労したがここでも協力し合うことであつという間にテントの撤収も終わり、焚き火の消火が行われた。荷物を軽くするためにも中途半端に残った飲料水等を焚き火にかけると、『ジュ〜〜』という音と共に炎が消えていった。この焚き火のおかげで2日間安心してキャンプを行うことができた。真っ黒になったかまどに一礼し、船に乗り込んだ。

帰りに高知山展望台へと向かった。瀬戸内町の町や海峡、そしてうっすらと本来行くはずであったハンミヤ島が見えていた。『来年こそはあの島に行くぞ』という強い思いを胸に学校へと戻り解散した。



ク おわりに

今回で2回目となる無人島キャンプ。今回は無人島ではなかったがここに来るには船で来るしかないという場所ただけに気持ちは無人島にいる気分だった。昨年よりテントを立てるのにも慣れ、問題なく2日間を送ることができたが、まだまだ仲間に頼ってしまっている部分が多くある。しかしこの協力するというのもキャンプで学べることの1つなのかなと思う。今回の経験で更に自然と戯れることの素晴らしさと仲間のすばらしさを確認することができた。奄美にいる時間も少なくなってきた。残り少ないチャンスで必ずやハンミヤ島の地に降り立ちたいと思う。

(6) 奄美満喫研修（清水 慶子）

ア はじめに

昨年度の研究紀要を見た時、「来年、私も行きたい」とお願いをしたことからスタートする。奄美大島に赴任して、アウトドアはたなが取りといざりくらいしか行っていない。日々の生活に疲れていた私はこのキャンプをずっと楽しみにしていた。

イ 出発まで

出発前に数回のミーティング。このミーティングで準備しなければならない持ち物や日程等を確認した。このときからドキドキワクワク。初めて聞く名称のものばかりだった。

私のキャンプは出発前から始まっていた。キャンプに必要な道具をそろえることからスタートだ。寝袋、テント、ストーブなど購入した。いろいろ種類もあったので、かなり楽しかった。とある人から、会うたびに「テントの立て方がわからないとか当日言わないで下さいね。」「持てない荷物はもってこないで。」などと言われていた私。「絶対、そんなこと言うか！！」とキャンプ道具が自宅に届いてから、一週間予行練習の日々が始まった。

テントを6畳間で初めて立ててみる。意外と簡単である。次は寝袋で寝てみよう。そんなことを2日間、実践した。また、「一日目の夜以外は料理も自分で。」と言われていた。料理は得意！！しかし、材料も自分で持って行かないといけない。簡単でおいしく、材料に冷蔵・冷凍品がないものなどいろいろと条件があった。「山と食欲と私」という漫画を発見し、熟読。おいしそうなレシピを参考に、事前にかなり練習したのは言うまでもない。荷物も最小限に、自分で持ち運びできるだけしか持って行かないと決め、

荷物を梱包した。おかげで誰よりも荷物は少なかった。

ウ 出発～

学校へ集合。いざ、ハンミヤ島へと意気込んで古仁屋港に到着した一行。しかし、海が荒れており、外海には出られず、天皇浜でのキャンプとなった。まず周囲の散策から始まり、テントの設置場所検討。テントは予行練習が出来ていたのので、完璧に立てることができた。そして薪を拾う作業と夕飯の準備。メンバーは全員がキャンプ好きの集まりというわけではなく、なんか楽しそうという一心で参加した人もいた。それなので夕飯はキャンプ好きが音頭をとって、どんどん完成していった。私は実は食事よりも、海が気になってしょうがなかった。それはその日が大潮だったからだ。大潮は潮の満ち欠けが一番大きい日。テントまで浸水しないだろうかと内心ひやひやしていた。無事に満潮を迎え、よかったと思っていた矢先。ふいに誰が、「明日の朝も満潮だよ。」といった。早く寝なくてはと思い、早めに就寝した。心地よい波音。自然の子守歌をききながら。

翌朝、自然と目が覚めた。携帯電話のアラームにも邪魔されずに、のんびりと起きた。時間を気にすることもなく、ただただ海音に耳をすませながら、ゆったりとすごしていた。朝ご飯も作り、それぞれが自由な時間を過ごしていた。今日こそは海に入り、自然を楽しもう！ということで、少し気分も上がっていた。海に入り、各々水中探索を楽しんでいた。しかし、11月で風も強い。寒くて20分で上がってきた。身体を温め、もう一度トライ。カクレクマノミや珊瑚など多くの水中生物を発見することができた。ゆったりと時間は過ぎていく。テントをたたまなくてはならない時間。名残惜しそうに帰る支度をした。古仁屋港に到着し、学校へ。メンバーをみると充実感でいっぱいの顔つきだった。

エ おわりに

人生はチャレンジしなければ面白くない。今回のキャンプの私なりのテーマであった。無人島に行くことと決めたこと、テントや寝袋で寝ることもある意味チャレンジだった。日々の生活の中での休息も大切だ。この少しの休息のために、毎日の生活をがんばることができると実感した。モノが豊かで便利、時間に追われる毎日。ゆったりとした時間を過ごすことの大切さも感じた。つぎはどんなことにチャレンジしようかと、今から考えたい。

ただ、一つ残念だったことは天皇浜が携帯電話を使用できる場所だったことだ。最後に今回一緒に参加してくれたメンバーに感謝したい。来年度はぜひハンミヤ島へ。

(7) 不完全燃焼（小藺真介）

こんな朝が、今では年に何回あるだろうか。興奮して眠れるわけもなく、薄い眠りから目を開け布団から出た。無理もない、一日千秋の思いでこの日を楽しみにしていたのだ。目覚まし時計とスマホのアラームを切り、“対”目覚ましとの連敗記録にストップをかけた。身支度を済ませ、大富先生と軽トラックに荷物を積み込み出発した。

昨年反省点から、海上タクシーが着岸した後、船からベースキャンプまでの荷物の運

搬を行う時間や体力の消耗を考えて、なるべく荷物はコンパクトにしましょうとメンバーにも警鐘をならしていた。警鐘を鳴らした手前、自分の荷物がコンパクトでないと思しがつかないと思い、身の回りの荷物が一つにまとめられるように、今回は、80ℓのダッフルバッグを導入した（写真1）。古仁屋港に到着し、船長と大富隊長が軽く打合せをし、風が強いため外海には出られないと報告があった。残念ではあるが、この時点で今回もハンミヤ島に上陸する夢は断たれた。しかしながら、臨機応変に対応し最善を尽くすのがキャンプの醍醐味である。全てが揃っているキャンプ場で計画通りに過ごすだけなら、ただのレクリエーションに過ぎず、出張でビジネスホテルに泊まるのとなんら変わりがない。小雨が降る中、船は出航した。天候が思わしくないのと、船酔いを恐れている隊員が多く、船内は少し静かだった。どんどんと雲行きが怪しくなってくる（写真2）。途中、油井小島を紹介されたが、どこにテントを張ればよいのか、皆目見当もつかず見送ることにした（写真3）。ここから、更に潮が満ちてくると思うと選択肢にも上がらないはずだ。



写真1 ダッフルバッグを背負った様子



写真2 出航後



写真3 油井小島

次に、天皇浜という加計呂麻島にある浜を紹介された。浜までの道路もつながっておらず無人浜ということや、海の様子から、天皇浜に決定した。浜に到着し、生活をする場所を探した。キャンプを行う上で一番重要になるのが、風や夜露から身を守り、体温を維持してくれるシェルターやテントの設営である。各々テント設営に取り掛かった。13年目の相棒となるムーンライトI型の設営はさすがに早い。大学時代、アパートの家賃を8か月滞納し、追い出されそうになったときも、「テントがあるから大丈夫」と常に自分の心の支えでもあった頼もしい相棒だ。昨年の反省から、浜では通常のピンタイプのペグでは役に立たないため、ペグを砂浜用（250mm、スパイラル形）に新調した。また、これまでペグを打ち込む際、掌底か、そこらにある石で代用をしていたが、さすがにそれでは長いペグを打ち込めないため、ペグ新調に伴いペグハンマーを製作した。今回は、時間が無く突貫作業で細かい仕様を検討しないままの製作だった為、今回使用してみて改良版を製作しようと思った（写真6）。

設営が終わり、いよいよ乾杯になったのであるが、ノンアルコール組に対してのソフトドリンクの準備をすっかり忘れており、やってしまったと反省と謝罪をしつつ、次回は飲み物も各人に任せようと来年度の決定事項に追加した。



写真4 天皇浜の散策



写真5 テント群



写真6 ペグハンマー

次は火床の設営に取り掛かった。食事や団欒を行う重要な施設である。風向きと風の強さを考慮し、浜にあったサンゴと岩を利用し製作した(写真7)。今年から、メタルマッチやファイヤースタータと呼ばれている、マグネシウム合金の火花による着火方法に集中的に取り組んでいる。何でもそうであるが、引き出しは多いに越したことがない。着火の方法は数あるが、今回のような水場では、マッチやライターでは濡れる心配があり、水に濡れても着火のできるファイヤースタータはマストアイテムと言えよう(写真8)。薪が集まり、いよいよ着火となった。どうせ一回目は失敗するだろうと隊員にやり方を教えるつもりでいたが、日頃の鍛錬の成果もあり一発で着火することができた。諸説あるが、火を扱うという技術は、人類が100万年程前に修得していた技術であり、それまで生食だけであった頃に比べ、消化吸収の効率が良くなり、その分のエネルギーが脳の発達に大きく影響したという。

昨年のキャンプでは一切の食事を担当したが、それではメンバーのスキルアップにつながらないと、今回は夕食のみを担当した。メニューは焼肉。牛肉、豚肉はジップロックに移し替えたのみで、鶏肉だけは家にあるスパイスやハーブ、ワインを適当に配合し漬けて持ち込んだ(写真9)。クミンやターメリックが多かったのか、カレー風味のチキンに仕上がっていた。



写真7 火床の製作



写真8 火おこし



写真9 夕食

夜も深くなり寝ようとテントに向かった。浜には砂浜の穴から出てきた、カニらしき生物が十数匹うろうろとしていた。初めて見るそのカニらしい生物は、目が縦長で比較的手足もスリム、全体は、白かグレーの色をしており月明かりに照らされボディは、まるでステンレスのような鈍い輝きを放っていた。はさみのようなものをかざしていたため、こちらが勝手にカニと決めつけていたが、こっそりと地球外から侵略を企てて住み着いていても、詳しくなければ見分けがつかないなど妄想を膨らましながら眠りについた。

昨年は蒸し暑く、決していい眠りではなかったが今回は寝袋に入ればちょうどよい心地

よい肌寒さでぐっすりと眠ることができた。しかし、その心地よさの中で、持論でもある「キャンプは苦行である。」ということを忘れかけていたが、自分のスキルアップのためにも、今回はテントを持参せず、オレンジのブルーシートだけでシェルター作りをやってみようと思った。

2日目。朝は、隊員の談笑の声で目が覚め、テントから出るとすでに4～5名ほど起きていた。もう焚き火には火がついており、今回は火をつけられなかったなど少しガックリした。波打ち際は、朝の時点でテントから1mちょっとの距離だったが、砂の濡れ具合や流木の状況から50cmくらいまで打ち寄せていたのが予想できた（写真10）。

この日のために、大富隊長がSUPを持ち込んでくれた。球技は不得意であるが、こと乗り物に関しては、何でもそつなく乗りこなす自信があったので、これも乗れるだろうと意気込んで挑戦した。調子に乗って漕いでいると、浅瀬でひっくり返り、岩で大腿部を強打してしまった。その後、意気消沈してしまった為、正座スタイルで漕ぎ、初めてのSUPを楽しんだ（写真11）。水中では、様々な珊瑚やイソギンチャク、それに身を隠し生活をしている魚たちに楽しませてもらった。昨日に比べ、天気は良かったが風が強く、海から上がると相当冷えた為、焚き火に当たり暖を取った（写真12）。



写真10 波打ち際



写真11 SUP体験



写真12 焚き火に当たる

いよいよ、帰りの時間になり片付けをして乗船ポイントまで荷物を移動させていると、沖から海上タクシーのエンジン音が聞こえてきた。1日を通して活動した仲間だけのことはあって、昨日に比べ協力してスピーディーに荷物を積み込み乗船した（写真13）。

帰りに、日帰りならハンミヤ島に行くことができると聞いた。「おっ、それなら。」と一瞬思ったが、今回のように潮の満ち引きや浜の表情、太陽の軌道や、月の満ち欠けは日中の数時間いるだけでは体感できない。やはり一晩テントを張ってみることに大きな意味があるのだと再確認した。

古仁屋港に近づくと、陸上自衛隊が訓練の一環であろうか、水陸両用車の同乗見学会を行っていた。このような美しい島々があるのもあなた方のお陰ですと感謝しつつ、後生に続くためにも近隣諸国との問題や、エネルギー・資源、環境問題など真剣に考えていく必要があると再認識した（写真14）。

荷物を車に積み込み古仁屋港を出発し、地藏トンネに入ろうとした瞬間、大富隊長が「ああっ、寄り道していい？していいよね？するよね。」と言い、班員の「いや、もう疲れたので今日は、まっすぐ帰りましょうよ。」という返答を待たず、もう一台の車へと電話をしていた。結局、少し引き返し、疲労困憊していた体にムチを入れ、高知山展望台に登ること

になった。遠くハンミヤ島が霞んで見えた（写真 15）。そのハンミヤ島を眺めながら、来年こそは絶対に上陸してやるぞと皆で誓いあったのであった。



写真 13 船に乗り込む



写真 14 水陸両用車



写真 15 瀬戸内の島々

4 おわりに

昨年度に引き続き、二度目の研修を無事に終えた。今回の参加者は昨年の四名から七名に増え、その分紀要の厚みも増した。面白いのは、七名が同じ行程をともにしたのにも関わらず、それぞれの紀要がほぼ異なった視点からのものであることだ。つまり、人の数だけ「奄美の姿」があり、奄美に対するイメージをどう形作っていくかは、その人次第だということである。今後も、ガイドブックを眺めるだけでは分からない奄美を求めて、研修を継続していきたい。

どの地も必ず魅力を秘めているが、奄美のそれは格別である。